

「金沢城編年史料」に収録予定の二次史料書目解説（１）

— 陳善録・象賢紀略 —

石野友康・木越隆三

現在進めている「金沢城編年史料（仮称）」に収録する予定の二次史料について、それらがどのような性格の史料であるのか史料研究を進めることが大切だと考えている。二次史料を編年史料集に収録するにあたりどのテキストが最も適切であるのか、またその史料の成立経緯や著者等に関して説明が必要であろう。当該二次史料の史料としての特性や限界を正確に示すことは難しい仕事であるが、それを目指して何らかの解説をしていくことは必要だと考え、研究紀要において史料解題もしくは史料解説につながるささやかな考察を掲げることにした。今回は手始めに利家・利長期の動向を知るに不可欠な「陳善録」・「象賢紀略」を取り上げ、書誌的な検討を行った。

（１）「陳善録」（「垂相公御夜話」）

藩祖前田利家の言行録として知られ、利家やその時期の研究をするうえで欠かせないものとなっているものの一つに「陳善録」がある。通説では別名を「垂相公御夜話」「利家夜話」「利家公御代之覚書」などと称したとされる。この書は前田家の先祖をはじめ、尾張荒子の土豪であった前田家が織豊政権のもとで加賀・能登・越中三カ国を領する大大名へと成長した姿を描いている。これまで、青山克彌氏の検討（『加賀の文学創造—戦国軍記・実録考』 勉誠出版 2006年）を除いては書誌的な検討は十分されておらず、あまり史料批判することなく利用されてきたきらいがあった。

本史料の筆者は村井長明（重頼）である。長明は、利家股肱の臣である長頼の実子であるとも（『改訂増補 加能郷土辞彙』）、養子ともされている（「諸士系譜」）。通称は勘十郎のち又兵衛、初諱は重頼または長之ともいう。のちに大聖寺藩士となり、大聖寺村井家の祖となった。

石川県立図書館等多くの機関に所蔵されるが、ここでは金沢市立玉川図書館加越能文庫、東京大学史料編纂所で調査した伝本の特徴について記しておきたい。

①刊本「垂相公御夜話」について

まず、活字化されているものをみていこう。「陳善録」は「垂相公御夜話」あるいは「利家夜話」などの表題で『史籍集覧』第13冊（1902年）、『日本偉人言行資料』（1916年）、『武士道全書』第8巻（1943年）、石川県図書館協会発行本（「垂相公御夜話」上中下巻で構成され、1934年初版、1972年復刻）などで活字化されている。なかでも石川県図書館協会発行本は比較的容易に閲覧でき多くの研究者に利用されている。ここではこの石川県図書館協会の刊本について触れておくことにしよう。

下巻末尾には『石川県史』などを手がけた日置謙の解題が付されているが、つぎのように記されている。

陳善録は同一の書に前田綱紀の加へられた題簽である。今尊経閣蔵本になつて居る陳善録は、著者の原本を謄写したものであると言はれてゐるが、その原本には読み兼ねた所があると見え、所々に附箋を加へて綱紀の意見を伺つた痕跡がある。今その尊経閣本陳善録と、尊経閣蔵有沢永貞本垂相公御夜話とを底本にして、書名は通俗向きに垂相公御夜話の方を採ることにした。

「陳善録」との題簽は加賀藩五代藩主前田綱紀が与えたもので、「陳善録」と「垂相公御夜話」は同一の書であると明言する。石川県図書館協会が活字化するにあたり底本を尊経閣本「陳善録」と尊経

閣所蔵有沢永貞本「垂相公御夜話」とし、通俗向きに「垂相公御夜話」との表題で刊行したという。

上記のうち「尊経閣蔵有沢永貞本」については、金沢市立玉川図書館に現存する「垂相公夜話」（請求番号16.12-36）のことであろう。「尊経閣蔵本になつて居る陳善録」については不明であるが、おそらく、後述東京大学史料編纂所謄写本のもととなったものであろう。

本史料の内容は、利家が信長や秀吉に仕え、尾張荒子の土豪から、越前府中三人衆、能登一国の領主、加越能三カ国の領主へと成長していった様子とともにその軍功と顕彰、そのなかで譜代としての村井長頼がどのような活躍をしていたかに記述の中心があり、前田氏を「善」、そして敵対した武将、たとえば天正12年末森の戦いで敵対した越中佐々氏を「悪」という立場で貫かれていて、いわば前田氏至上主義的な見方で展開されている。前田利家の所伝を書かれた岩沢愿彦氏は的確にこの史料の史料批判を行っているが（人物叢書『前田利家』）、編年史料集などにおいて出典とする場合には、やはり慎重であるべきであろう。しかしながら、荒子時代の前田家とその家臣の雰囲気は感じ取って良いように思う。

活字本では、記述の仕方はできるだけ編年的にまとめようとする意識はあるものの厳密ではないことがわかる。

②二つの系統

村井長明の記した利家の言行録は大きく二種類存する。すなわち、「陳善録」（「垂相公御夜話」）の系統と「村井重頼覚書」の系統である。

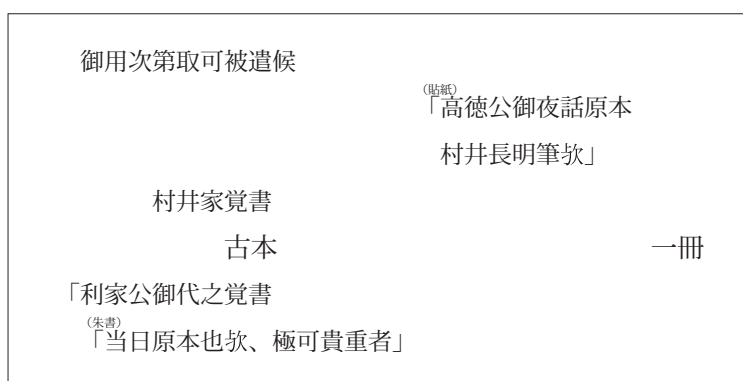
A 「陳善録」（「垂相公御夜話」）系統

まずは「垂相公御夜話」の系統からみていく。

①〔「利家公御代之覚書」〕

「垂相公御夜話」系統の書で最初にあげるべきは加越能文庫「利家公御代之覚書」であろう。本史料は「利長公御代之覚書」とともに一つの桐箱に納められている。

包紙には、



とあり、「高德公御夜話」の原本であるとし、村井長明の自筆の可能性がある。高德公とは、利家の法名（高德院殿桃雲浄見大居士）にちなむ呼称である。村井長明の自筆の原本か否かは今後詳細な検討が必要であるが、印象的にはきわめて古いもののように感じられる。

冒頭の墨付一枚程度は欠損しており、かろうじて「一、伏見にて福嶋左衛門大夫殿より大納言様へ」という文言がみえるにとどまっている。

さて、村井長明自筆の夜話集をめぐるのは、「葛巻昌興日記」（金沢市立玉川図書館蔵）に次のよ

うな記述がある。

飛騨守様御家来村井又兵衛長明方より 瑞龍院様御事、故又兵衛自筆之記一冊上之、是ハ最前所入御覧也、今度横山筑後奉之にて重而申遣也、且又 高德院様御事記候書^{世間流布御夜話 下大藏同書之由} 一冊、是又作者故又兵衛自筆之書之間、本書可被留置旨被 仰出、則奉畏旨及御請也、右之条今日筑後達 御聴也

(「葛巻昌興日記」22 元禄元年11月26日条)

今度村井又兵衛方より故又兵衛自筆之記録依令献呈之、被成下 御直書云々、御書之趣、

内々令懇望候記録到来芳情之至候、誠自愛不斜候、謹言、

十二月十日

御字御判

村井又兵衛殿

(「葛巻昌興日記」22 元禄元年12月11日条)

利家・利長の治績を示した長明自筆の覚書が子の長時のもとに伝わっており、元禄元年に藩主綱紀は一覧のうえ所望したという。こうして前田家に「瑞龍院様御事、故又兵衛自筆之記一冊」と「高德院様御事記候一冊」が綱紀の手中におさまったのである。

この二点の覚書がすなわち「利家公御代之覚書」と「利長公御代之覚書」であるかどうかは今後検討すべき課題ではあるが、もしそうだとすれば、長明自筆本ということになる。

「利家夜話」などの題箋をもつものもこの系統である。

②謄写本「陳善録」

(東京大学史料編纂所蔵 請求番号2044-291)

東京大学史料編纂所に「陳善録」がある。奥書には「明治廿三年二月侯爵前田利嗣蔵本ヲ写ス」とあり、前田家蔵本を原本とする。冒頭部分には、欠損があったらしく、何らかの事由により文字が確認できないことを示す痕跡がある。そこで、想起できるのが、上記金沢市立玉川図書館蔵の「利家公御代之覚書」である。2つを見比べてみたところ、欠損表示の箇所、ルビが打たれている箇所も一致し、玉川図書館本で貼紙している箇所が史料編纂所本では朱書されるなど、玉川図書館「利家公御代之覚書」の写本である可能性がきわめて高い。すなわち玉川本「利家公御代之覚書」＝東大本「陳善録」(＝前田利嗣蔵本)だとみることができる。とすれば、既に明治23年の段階において玉川本の冒頭部分がすでに欠けていたことを示していることになる。



「利家公御代之覚書」
(金沢市立玉川図書館蔵)

B「村井重頼覚書」系統

「村井重頼覚書」(東京大学史料編纂所蔵 請求番号2040.5-181)

これも利家の言行録として知られる。「陳善録」と同じ村井長明(重頼)の覚書として知られるが別史料とみてよい。「陳善録」同様利家の言動を記す箇所があるほか、利家あての信長・秀吉の書状類や「慶長元年之御帳うつし」(侍帳)なども収載し、『加賀藩史料』にも採られるが、とくに書状類については慎重でありたい。「陳善録」(＝「亜相公御夜話」など)とは区別し、ここでは仮に「『村井重頼覚書』系統」とした。この書も前田家や村井家の顕彰・手柄を意図して描かれているようで、編年史料で活用する場合にはこの点に留意すべきであろう。

表紙裏扉に「付箋 此一冊ハ重頼自筆ノ原本ヲ写シタルナリ」とあり、奥書に「明治廿三年二月侯

爵前田利嗣藏本ヲ写ス」とあるから、前掲「陳善録」とほぼ同時に作成された写本であった。現在金沢市立玉川図書館には、前田家編輯方による同名の写本一冊が所蔵されている。（『請求番号16.12-31』がこれと同じものであった。「重頼自筆ノ原本」はいまだ確認できていない。

（石野友康）

（２）象賢紀略（利長公御代之おぼえ書）

「象賢紀略」は既刊史料集『御夜話集（上編）』（石川県図書館協会 1972年再刊）に載る周知の旧記である。利家の死去した慶長4年閏3月から、「象賢紀略」の著者である村井勘十郎が前田家から召し放たれた慶長7年10月までの約二年半、前田家中で起きた諸事を利家側近の家臣が筆録した記録として古くから注目され、多くの論著で活用されてきた。末尾に掲げた「内容一覧」は、刊本「象賢紀略」に掲げる約60項目の記述内容を時代順に並び替え、村井勘十郎が慶長4～7年に見聞した出来事を編年的に一覧したものである。この多くが、現在編集集中の「金沢城編年史料」に取り上げられるべき事項であり、参考資料として利用できる所もあらうと思い付記した。

『御夜話集（上編）』の底本は森田文庫所蔵本で、これを森田本と以下呼んでいくが、森田本は前田育徳会所蔵本の写本である。『御夜話集（上編）』の校訂・解題を行った日置謙は、森田本を底本にしながら、森田本の底本である前田育徳会所蔵本を未だ見たことがないと述べている。戦前時点で閲覧不可であった前田育徳会所蔵本は、戦後になって金沢市立玉川図書館に譲渡された中に含まれていたもので、その点を踏まえ『御夜話集（上編）』所収「象賢紀略」解題の不備を補っておきたい。



「利長公御代之おぼへ書」（金沢市立玉川図書館蔵）

現在、金沢市立玉川図書館蔵加越能文庫に①「利長公御代之おぼへ書」16.12—54（箱入31丁）、②「利長公御代おぼへ書」16.12—55（30丁）という二つの「象賢紀略」伝本があり、箱入りの①は、日置が見たことがないと述べた前田育徳会所蔵本であり、②はその写本である。ほかに③「利長公御時代覚書」16.12—53（30丁）という旧記があるが、内容は「象賢紀略」と別種の旧記で、天正11年から慶長19年までの利長の事績を年譜風に摘記するもので、とくに慶長五年の大聖寺城攻めと関ヶ原前後の利長とその家中の活躍に多くの頁が割かれている。著者は不明である。

さて「象賢紀略」と命名したのは、元禄年間に本書を入手した綱紀である。「利家公御代之覚書」「利長公御代之おぼへ書」という珍書二点が、大聖寺藩士村井長明から献上されたことに感銘をうけた綱紀は、先祖の業績を景仰し大切に保管するとの思いを込め、前者に「陳善録」、後者に「象賢紀略」という名称を与え、前田家の書庫で大切かつ厳重に保管した。現存する箱入りの「利家公御代之覚書」「利長公御代之おぼへ書」（写真）を実見すれば、永く厳重に保管されてきたことがしのばれる。

その来歴に鑑みれば、本書は「象賢紀略」と呼ぶより、「利長公御代之覚書」としたほうがよいように思うが、永く「象賢紀略」として利用されてきたので、われわれも象賢紀略・陳善録という名称を使うことにしたい。

「象賢紀略」すなわち「利長公御代之おぼへ書」は、「村井勘十郎筆記」とも題される。村井勘十郎の経歴にふれつつ、彼の筆録した「象賢紀略」が、どのような経緯を経て綱紀の蔵書になったのか、

森田平次が残した記録等を援用し瞥見しておきたい。

村井勘十郎は、村井豊後守長頼の次男である。兄出雲長次が父の跡を相続したが、次男の勘十郎は初め勘十郎長之と名乗り、のち長明と名をかえ又兵衛重頼とも称した。文禄4年正月、伏見にいた大納言利家から200石で召し出され、神谷信濃とともに奥方御用裁許をつとめ、慶長5年の利長による大聖寺城攻めに参戦し、軍功が認められ250石の加増をうけ、人持組450石取に昇進した。しかし、慶長7年秋に不慮の事件で前田家を去ったが、慶長13年、200石で前田家に復仕した。そのあと寛永16年の利常隠居に際し、大聖寺藩主初代利治に仕え、300石取の大聖寺藩士となり、正保元年、62才で死去した。重頼（長明）の嫡男長時は寛永14年以来、利常に仕えていたが、父死後、父の跡を継ぎ大聖寺藩士300石取となった。長時は先代勘十郎長明の著作である「利家公御代之覚書」「利長公御代おぼへ書」を所蔵していたが、このことを知った前田綱紀は、寛文12年にその閲覧をもとめ、食指をのぼしたが、その時は献上に至らなかった。しかし、元禄元年に再度、横山筑後（正房）を介して閲覧と献呈を打診したところ、大聖寺藩士の村井長時は、宗家の藩主綱紀に、勘十郎筆記の二つの覚書を献上すると決め、綱紀の蒐集蔵書の中に加えられた。

なお森田本「象賢紀略」の末尾に書かれた森田平次の跋文は、刊本『御夜話集（上編）』解題に掲載されていないので、ここに全文翻刻しておく。これによれば、森田本「象賢紀略」の成立時期は明治28年ということになる。写本である森田本によって、おおむね本書の概要は押さえられるが、今後の加賀藩研究においては、加越能文庫所蔵①本にもとづく検証・校訂をさらに進める必要がある。

（木越隆三）

* 森田平次 跋文

「加州大聖寺旧藩士村井氏始祖又兵衛重頼所筆記之陳善録<世俗所謂垂相公夜話録之原本>并象賢紀略之両書、重頼自筆之原本彼家伝来之处、吾旧藩五世参議中将従三位綱紀卿、嘗一覽、元禄元年戊辰之冬、命藩士横山筑後正房、被令所望焉、依之二代村井又兵衛長時、不得固辞、随命両原本呈進之、卿甚自愛不斜之旨、賜懇命之親書、以彼両書為秘府之珍書、被納置干金沢城金谷文庫也、然廢藩之際、明治三年之春、依十四世従三位慶寧卿之命、予文庫入之秘書・珍本悉皆取調之处、右両原本不計一覽、陳善録三冊、雖不異世俗流布之夜話録、校合之处、世本脱文等不少、象賢紀略者、僅雖一冊子、其写世人不知之、二世贈垂相利長卿之記録而其時世之筆記、実可謂珍書也、予竊以彼原書不違一字一点之仮字、随原文之書体模写焉故其写存在干吾家耳也、以無副本、今更校正而謄写之、為自愛之珍書、伝於吾子々孫々者也、

于時 明治廿八年九月上旬

柿園舎主人 森田平次識（朱印） 「< >は割書

「象賢記略（利長公御代々おぼへ書）」編年分類（慶長4年閏3月～慶長7年）		
年 月	[月・日] 記述の概要	記載順
慶長4年閏3月	[閏3・3] 利家逝去、遺言により、日を置いて遺骸を金沢に運ぶ。	1
慶長4年4月	[4・8] 利家の御葬礼。著者である村井勘十郎が葬列の御太刀持を勤めた。太刀持につき色々の申し分があり、前田対馬など年寄衆の吟味を経て、村井豊後息子（勘十郎）に決まった。なお利長・村井豊後・奥村伊予は利家の遺言により上方にいた。	1
慶長4年4月	[4・14] 御葬礼のあと、神谷信濃・村井勘十郎・脇田帯刀は上方の利長のもとに行き葬儀終了を報告。利長は「世上忙しきとき早速の上坂尤も」とねぎらい、神谷信濃を高野山に行かせ五輪塔建設を託す。	1

慶長4年4月	[4・16] 利長は太田但馬をして、村井勘十郎・脇田帯刀に「御礼申上げる」よう申し渡したので、16日に御礼申上げた。	1
慶長4年4月	利家逝去から27日過ぎた頃（4月初旬）、大坂城の利長は伏見城に城移りした家康公を御見舞いに訪問した。石田治部を佐和山城に追い払った直後で、利長は用心して警護に3千の人数と鉄砲大將を添え伏見に出かけ一晩逗留した。その時村井豊後が御屋敷警護を万事申付けたので、機嫌よく大坂に帰った。	2
慶長4年7月	[初旬] 利長は摂津国明石まで鷹狩に出かけた。利家以来の家来として、奥村河内・神谷信濃・脇田帯刀・今井左大夫・村井勘十郎の5人に御供せよと仰出て出行。	3
慶長4年	大坂にて利長は、大野修理・片桐市正などへ、御成の並に振舞い御馳走した。	4
(慶長4年か)	大坂城で利長が、石子掃部を殊の外叱ったため、10日ばかり掃部は出仕をやめた。御理を色々行い事は済んだが、掃部復帰の後には、その遺恨か掃部の兄弟石子備前・紀伊守は家康にたいし利長と家康の間柄を欠くような画策をした。	5
慶長4年5・6月：逸話	利家逝去のあと、世上騒がしきなか、大坂の横山邸を利長が訪問した折、弁当30人前取寄せ振る舞った。それより大弁当が流行し、太田但馬は弁当を50余り取寄せた。浅井左馬は100人分の弁当を取寄せた。そのあと、両おとなの但馬と大膳は大弁当で振る舞うような雑作は無用にすべしとて、弁当は30人までと法度を出した。	50
慶長4年8月	利長は、加賀・越中へ鷹狩に下向した。早々に利家様の御遺言に反する行いであり、「御うんのすゑか」と村井豊後・奥村伊予などは笑止がり申された。	6
慶長4年8月～	利長の金沢下向のあと、案じた通り家康公が伏見から突如大坂城西の丸入った。その時奥村伊予は大坂にいて芳春院様に付き添い、村井豊後は伏見の御旅屋にあり万事を差配した。その際、村井豊後は、家康の軍勢に紛れ込み密かに大坂に潜入し大坂の芳春院屋敷に駆け込み、芳春院は涙を流して喜ぶ。その頃から、利長と家康の仲が悪くなった。	7
慶長4年秋：逸話2	慶長4年に家康が大坂城西の丸に入城したとの御注進が方々より、金沢の利長に届いたとき、富山にて太田但馬・横山大膳の二人が御前にて論争。但馬は早々に上方に人数を送り、一戦構える覚悟で出役すれば、味方多く、芳春院様も利政も上方にいるから優位に事が運べると論じた。横山大膳長知は上方への出陣は御大事であり慎重にとたしなめた。利長は大膳の主張に傾き、上方出陣を一日一日と先延ばしした。浅井縄手の退き口での手柄は但馬にあり、但馬の武道を利長は褒めた。	47
慶長5年正月	利長は正月の法度で、華麗なる家中振舞は沙汰の限りと仰せ出す→3月鉄砲干しのついでに、家臣相互に振舞いが流行した。太田但馬は贅沢遠慮といって欠席し褒められた。	14
慶長5年3月	大谷刑部から利長に「横山長知と有賀有賀斎を上方へ出せ」と仲裁の心で連絡がきたので、3月、2人は上方に赴く。かつて利長に仕えたことのある種村三郎四郎（柴田旧臣、琵琶の「尚椎寺」と名乗り京都に隠棲。大田但馬と縁者の者）がおり、（大谷刑部は）その種村を下して色々取り成しをした。さて、芳春院様は江戸へ人質に下ると決まった→芳春院の人質についても、色々な交渉があった。前廉は家康子息おまん殿を利長養子に迎え、加賀2郡を渡す案など、色々あった。	8・9
慶長5年3月	鉄砲干しの時、家臣上下互いに慰の宴席が流行した。富田半左衛門方にて太田但馬を招き宴が催された。相伴は今枝内記・小塚権大夫・上坂又兵衛ほか勝手衆の神谷信濃・脇田帯刀・今井左大夫・村井又兵衛であった。大田但馬は出されたきぐ仕立の御膳をみて押しとどめ、今年正月の利長法度に背く贅沢だと断り、平折敷に入れ直した。この一件を耳にした利長様は機嫌よく、太田を褒めた。	14

慶長5年5月	〔5・17〕 芳春院、江戸に人質に下る。御供は当初奥村伊予との御意であったが、中川宗半をかたらい煩いと物語るゆえ、村井豊後を頼んだ。豊後はこれがおさめの奉公といい引き受けた。勘十郎（又兵衛）は5月6日に金沢を出立し伏見に上った→その頃、村井左馬助は利政衆として上方におり、左馬助方にも利長様御書が届けられ、豊後の江戸御供御請に満足との意向を伝えた→江戸下りの2・3日前、太田但馬が御使として上方に上り、前波加右衛門・野村勘兵衛らも同行した。江戸迄の御見送りは、高畠石見守が人数を率いて出役し、舎弟の高畠木工・平右衛門兩人も同行した。芳春院の見送りに集まった家臣たちは、伏見屋敷の惣袋の間取り放して、利政衆の大名小名残らず、中川宗半などもいた。そこで太田但馬が、豊後に肥前様からの書状を読み上げ、豊後は謹んで御意を受けると述べ、豊後の武功と功績を一同で称える。	10・11・13
慶長5年前半	家康と利長の申分出来のとき、伏見・大坂上下相互に気遣いの時分に、利政は伏見にいて日々、何の構えもなく30人ほどで鷹野に出ていた。村井豊後・奥村伊予はじめ大名小名共に、「さりとは丈夫なる心中かな」と称賛され、「利政はただ者にあらずと申しならし候由」。	12
慶長5年7月	〔7月26日〕 利長公、福留村まで御出馬。〔7月27日〕 利長、三堂山を御本陣とし、4・5日逗留し砦も造成。千代にも砦作る。三堂山には岡嶋備中・不破彦三の軍勢を配置。千代城には前田孫左衛門・寺西善太郎らを配置し、利政衆も置いた。	15
慶長5年8月	〔8月1日〕 利長、軍勢を大聖寺に向け移動させる。小松城の押えのため富田下野・小塚権大夫・神尾図書らを配置したが、小松（丹羽方）より船で攻撃をうけ撃ちあいとなった。その後、全軍鴨野に合流し、利長様はとくに満足し2日、鴨野で軍勢を揃えた。	15
慶長5年8月	〔8月3日〕 利長は大聖寺城の攻撃を命ずる。そのとき、諸将から利政様の用兵、家臣の扱い方について褒める声。「さりとは大納言様の御子様」→大聖寺攻めの討死は奥村采女など20人余。手負いの高知衆としては浅井左馬助・葛巻隼人・日根助五郎・村井又兵衛ほか10人余であった。	16・17
慶長5年8月	〔8月9日〕 大聖寺落城につき、利長は軍勢を引き上げた。浅井村では松平久兵衛・水越縫殿らが、鍵合わせ申す事につき様々に語らう。今回の城攻めでは太田但馬に比肩する軍功はなかった→利長の二度目の御出馬のとき、小松を水攻する準備を周到に行ったが、丹羽加賀守は「兜を脱ぎ」、利長の「扱い」身柄預かりとなった。また江戸の土方勘兵衛が勘気を許され金沢に帰り、利長の「扱い」となった→大聖寺表へ利長出陣のとき、家康は宇都宮から江戸に帰り、村井豊後を呼び寄せ利長宛の自筆書状（礼状）をしたため、芳春院に見せうて芳春院より利長に渡した。	18・19・28
慶長5年8～9月	（2度目の出陣の際）加賀守（丹羽長重）と利長様が人質を交換し、利長様は「お犬様」利常、丹羽は甥子を差し出した。それゆえ、利長軍は小松町中を堂々と武者押しした。そのあと越前北庄城も利長の扱いとなり、二ノ丸に不破彦三らの軍勢を配置したうえで利長軍は上洛した。	20
慶長5年9月	〔9月15日〕 関ヶ原合戦で西軍が破れ、家康公が上京したと聞き、利長様は急ぎ近江海津より舟にて大津に移った。軍勢は今津に滞在させた。大津で家康公と対面し、格別の御礼を言われた。その時、逮捕されていた石田・小西・安国寺に利長が接見したので、上方の民衆はこの接見を褒めそやた。	21
慶長5年10月～	家康、大坂城西の丸に入る。島津氏が国元に退却。江戸中納言秀忠が薩摩へ出馬と決まったので、利長は先手を望み、家臣一同酒盛りをして九州の土になる覚悟を語り合ったが、秀忠・利長の出馬は延期となった。	22

慶長5年	利長様の2回目の出馬のとき、利政に急ぎ出馬せよと使節がきたが、大谷刑部の才覚で京都の常盤と申す町人坊主を利用し、利政正室の避難にことよせ利長との間柄を分断させた。その結果利政は利長のもとに出馬しなかった。のち家康は常盤を成敗した。	24
慶長5年：逸話1	関ヶ原陣のとき、秀頼書状が石田三成から利長のもとに届いたとき、金沢の御書院にて、高畠石見・青山佐渡・太田但馬・山崎長門・横山大膳・篠原出羽などが御前にて御相談。その時、高畠石見は母を捨て大坂方に味方せよと主張し、殊の外利長の機嫌を損じた。	45
慶長5年：逸話3	利長、大聖寺攻めのときの幟、馬印などの記録	51
慶長6年9月	江戸より姫君様、金沢へ輿入れの御迎えに利長、手取川まで出御。小姓20人きらびやかに騎馬にて御供→珠姫の御供は大久保相模・青山常陸・鶴殿兵庫・青山善左衛門など。越前金津上野にて御輿取り渡しするとき前田対馬、御輿を受け取る。	25・26・27
慶長7年正月	利長は、珠姫輿入れの御礼のため正月8日、江戸に下った。その前正月6日、村井勘十郎は御供38人の中に選ばれ、江戸への先使を命ぜられた。越後で吹雪にあったが正月15日に江戸参着。芳春院様に御礼に行き、17日秀忠様に御礼言上。そのとき秀忠から勘十郎に、利家の近習奉公の者であって村井豊後の子息だったとは知らなんだと、豊後を呼び出し色々御意を仰せられた。利長の江戸の宿舎について尋ね、娘の嫁ぎ先の舅である利長様を寺方に泊めるのは心苦しいといい、榊原邸を御宿と定めた。村井豊後・勘十郎の父子は、秀忠から慰問なる言葉や拝領物をいただき、父子とも忝く存じた。	29・30
慶長7年正月	利長、江戸下りの途中、御法度場で鷹狩りを行った。鴻巣まで村井勘十郎が迎えにくくと、利長の機嫌はよかった。	31
慶長7年正月	正月26日：利長一行は榊原邸に到着。27日朝、江戸城に上り、御膳の馳走をうけ、拝領物得る→御供の横山大膳・富田下野守・斎藤刑部・江守平左衛門らにも礼物拝領。	32・33・34・35
慶長7年3月	3月末、芳春院様が有馬の湯に行く。徳川家からの許可もうけ、有馬に旅したおり、村井豊後は金沢に一時戻った→（慶長7年）金沢大踊りの年、芳春院は將軍の許可をうけ有馬の湯へ。随行した村井豊後は金沢に久しぶりに戻り、又兵衛重頼のもとで家中大小名に馳走をした。8月14日には利長から拝領した鶴を豊後自ら料理し振る舞った。14日の宴では、大聖寺合戦、浅井縄手の戦いの武辺談話で盛り上がり、豊後に「善悪をはや見申す仁」と褒められた山崎長門が感銘したことなどをつづる。横山大膳は腹痛で欠席。参会者：山崎長門・浅井左馬助・寺西宗与・斎藤刑部・江守平左衛門・奥村長兵衛・山森伊織など。勝手衆として脇田帯刀・山田八右衛門・今井左大夫・脇田善左衛門・河原半左衛門・村井出雲・村井又兵衛。	38・49
慶長7年	利長、大坂・伏見城での御礼済み、金沢に帰城する時、去年から越前北庄城に入った結城秀康（三河守）様に立ち寄り御礼を申し上げた。三河殿は殊の外馳走し、贅沢な酒盛りの宴であった	36・48

慶長7年5月14日 または17日	犬千代（利常）の小松城御移りにつき、随伴した衆は、守役の奥村伊予ほか岡嶋備中・奥村河内・横山右京、津田遠江らであった。さて太田但馬は、利長の江戸・伏見御礼廻りの随行を終え帰城したが、利長は5月14日に横山長知に命じて但馬を御城にて成敗した。但馬の新座・与力衆はすべて改易された→大聖寺城主成敗のあと、大聖寺の本丸に横山右京、鐘が丸に津田遠江を遣わした。その後、横山因幡（右京と同一人か）の死去により、近藤大和が大聖寺に遣わされた→大聖寺陣のあと3年間は太田但馬の利長様御前への出頭ぶりは、他に肩を並べる者がなく、大聖寺城を預けられ1万5千石を得、ほかに城領5千石を加え2万石の大身に出世した。横山大膳に金沢城にて成敗を申付けた5月17日の10日前、但馬の御でかけ衆おいまはじめ中使5人の目を抜いて家中人持衆に見せたという。この事件のあと兄弟のように仲が良かった大膳と山崎長門の仲が悪くなった→その頃の前田家中は太田但馬方の面々と横山大膳方の面々に分かれていた。	37・41・ 52・53・ 54
慶長7年8月	8月初頃：姫君様のため、踊りの会を設け、利長は鼓を打ち、村井豊後・安見隠岐・斎藤刑部らは塩汲みに変装し踊りを楽しんだ。	38
慶長7年9～10月	利長の御意をうけ、芳春院様の江戸下向にあたり、横山長知が御供したが、もう1名は奥村伊予と考えたが、利光（お犬様）の守として若君がなついているので、今度もまた村井豊後に頼んだところ軽々と受けた。	39
慶長7年10月	その年、10月晦日、御城天守へ雷落ち候事	40
慶長19年 利長逝去時逸話	利長、53歳にて高岡に逝去。一門衆、家中人持・小姓・馬廻残らず、金銀を御ゆい物に下された。そのほか略	46
その他逸話 1	村井又兵衛重頼（著者勘十郎）が前田家を立ち去り浪人したあと、利長は富山城に隠居した。そのあと浅井左馬助も浪人した。	42
その他逸話 2	又兵衛重頼（著者勘十郎）は牢人したあと、芳春院の推挙で浅野弾正殿に仕官し、真壁という所で知行を得た。利長は江戸へ下った折、重頼の召し返しを申付け、高岡城で仕官の御礼を済ませた。	44